

被災地での宿泊研修—防災士養成講座（講義と演習）

宿泊研修では、初日の夜と、二日目の夜に、講義・演習形式で四つの防災士養成講座を受講しました（南三陸ホテル観洋内）。実際に、東日本大震災で被害を受けた地域を見て、震災を体験した方々の話を聞いた後に行ったことで、より具体的な防災に関する知識や心得を学ぶ時間となりました。この宿泊研修中の講座では、グループワークも多く取り入れられていました。

[4]「避難所の開設と運営」

[5]「地域の自主防災活動」

講師／山元町立山下中学校 防災担当主幹教諭 高橋 健一先生

特定非営利活動法人 日本防災士会 常務理事 橋本 茂氏



左／山元町立山下中学校 防災担当主幹教諭 高橋 健一先生
右／特定非営利活動法人 日本防災士会 常務理事 橋本 茂氏

初日の夜は、防災士養成講座 [4]「避難所の開設と運営」、[5]「地域の自主防災活動」について講義と演習が行われました。

高橋先生からは、避難所に大勢の人が集う中で発生する「震災後の不安」についてや、学校を居住場所と活動場所に分け、避難所としての自治活動が円滑に行われるための、様々なインフラ整備の取組について、山下中学校の事例を基に説明頂きました。

山下中学校では、避難者や中学生がボランティアとして活動した事例が多数あったことを聞き、参加者の多くが感心したという感想を述べました。加えて、地域防災の向上につながる「受援力」を高めるためには何が必要かも、自分たちで考える機会となりました。

また、「首都直下地震が発生した」という前提の下、例えば家族との連絡方法、ペット連れの家族への対応、食料配給のサポート、外国の方のサポート等、具体的な場面を想定し、「自分なら、そのとき、その状況でどう行動するか？」という避難所での行動について、橋本氏の指導で、グループごとに協議を行いました。



[6] 「津波の仕組みと被害」

[7] 「被害想定とハザードマップ」

講師／東北大学名誉教授 首藤 伸夫先生

株式会社 防災士研修センター 代表取締役、特定非営利活動法人 日本防災士機構 理事 甘中 繁雄氏



左／東北大学名誉教授 首藤 伸夫先生
右／株式会社 防災士研修センター 代表取締役
特定非営利活動法人 日本防災士機構 理事 甘中 繁雄氏

二日目の夜は、防災士養成講座 [6] 「津波の仕組みと被害」 [7] 「被害想定とハザードマップ」について、講義と演習が行われました。

津波に関して世界的な権威である首藤先生からは、歴史的視点から、津波等自然災害の被害、及び日本の津波対策の歴史について説明を頂きました。また、津波のメカニズムや津波数値計算と、その問題点についても解説。地形により異なる津波の動きについて学ぶ機会にもなりました。

続いて甘中氏が行ったのは、「D.I.G. (Disaster Imagination Game)」という演習手法を用いたグループワーク。※「D.I.G.」は、“災害を知る、まちを知る、人を知る (Dig: 掘る、探求する、理解する)”の意味もある。

「あなたが住む町で大地震が発生したら」というテーマで、被害状況やライフラインの状態を想定し、家族と連絡を取る方法や、必要なものが何かをシミュレーションしました。

グループ内で協議し、「個人・我が家ですべきこと」「地域(学校や隣近所)で取り組むこと」「自治体(市役所)に依頼すること」という分け方で意見をまとめ、発表を行いました。



被災地での宿泊研修—南三陸町での交流活動

宿泊研修の最終日は、南三陸町の消防署員から東日本大震災における南三陸町の状況を、東京消防庁の職員から東日本大震災における緊急消防援助隊（消防の広域応援）の活動について、それぞれお話を伺いました。また、参加者が宿泊した南三陸ホテル観洋の女将からは、震災から現在まで、同ホテルが復興の基点となるべく活動してきた内容を伺いました。

講師／東京消防庁 防災部 防災安全課 総合防災教育係長 小暮和弘氏

講師／気仙沼・本吉地域広域行政事務組合 南三陸消防署 当直司令兼警防第二係長 及川 孝氏



東京消防庁 防災部 防災安全課
総合防災教育係長 小暮 和弘氏

東京消防庁の小暮氏より、東日本大震災における東京消防庁の活動が説明されました。東京近郊及び東北方面での活動、特に福島県の東京電力原子力発電所での活動について詳細を伺うことができました。小暮氏からは「地域防災の担い手である皆さんに、大地震は東京でも起こり得るので、まずは家の中等、身近でできることに興味を持ち、防災力を高め、伝えていってほしい。」というメッセージを頂きました。

また、南三陸消防署の及川氏からは、震災時の署の被害状況や活動状況を克明に説明頂きました。消防署に駆け付けた南三陸消防署員が津波に流されてしまったが、それを助けてくれたのは、以前、防災や救急講習で指導をした戸倉中学校の生徒だったとのこと。「日頃から訓練することの大切さ、中学生であっても命を救うことができるのだということ」を痛感した。」と語ってくれました。



気仙沼・本吉地域広域行政事務組合 南三陸消防署
当直司令兼警防第二係長 及川 孝氏

及川氏は、「日頃から周りに目を向けることが大切。また突然、災害に見舞われると、とっさに多くのことに対応できないこともある。だからこそ、事前に対策をしている防災リーダーが必要なのです。」と、参加者にメッセージを贈りました。

防災リーダーとしてやってほしいこと...

- ①自分の身を守る対策をしよう！
・家具の転倒防止 ・時間帯による行動制限
- ②家族と防災について話し合おう！
・非常持ち出し品 ・発災時の集合場所(時間帯や曜日別)
・その後の生活まで
- ③皆さんが住んでいる地域を理解しよう！
・地域の特性や危険要因(地理、街、人口等)
- ④防災訓練や各種イベントに積極的に参加！
・近所の方達との協力(顔の見える関係作り)、先頭に立って行動している人を知る。
・避難所運営への積極的参加(公的機関や民間組織の連携を知る。食料、医療、トイレ、プライバシー、要配慮者等々...)



被災地での宿泊研修—南三陸町での交流活動

講師／南三陸ホテル観洋 女将 阿部 憲子氏



南三陸ホテル観洋 女将 阿部 憲子氏

参加者が宿泊した、南三陸ホテル観洋は、東日本大震災時、近隣住民のための避難所となっていたそうです。その時の様子を、女将の阿部憲子氏が、映像等を交えて紹介してくださいました。

同ホテルでは避難者全員に食料がいきわたるよう従業員のおにぎりを半分にして分け合う、調理長が1週間の献立を考える等、全従業員が「自分のすべきこと」を確認し合い、行動していたそうです。「従業員は、自分の家族のことも心配だったでしょう。でも“みんなの力”を信じ、“心を強く”と何度も声を掛け合いながら頑張りました」(阿部氏)

避難所となったホテルには、1,000人ほどがそこで生活していたとのこと。そこには子供たちもいたので、子供たちが勉強を続けられるようにと、大学生が先生となって英語やそろばんを教える“寺子屋”や、引きこもり防止のためのコンサート、編み物教室も開いたそうです。ホテルが避難所となった時、そこに新しいコミュニティが作られていったのです。

阿部氏は、「千年に一度の災害は、千年に一度の学びの場」であるとし、この災害から学び、そして伝えていくことの大切さを繰り返し語ってくれました。

南三陸町での交流活動として聞いた3名の方の講演に共通していたのは、災害が発生した際に防災リーダーとして活躍するためにも、「自ら生き抜くことが大切」ということ。参加者全員の胸に、その言葉が響いたようです。



※及川 孝氏、阿部 憲子氏からの講演、及び語り部バス等については、防災士養成講座のカリキュラム(防災士養成講座[8]「行政の災害対応」、[9]「地域の復旧と復興」)となっています。

被災地での宿泊研修—南三陸町での交流活動

「語り部バス」で、旧戸倉中学校・旧戸倉小学校跡地、旧高野会館、南三陸町旧防災対策庁舎（代表生徒による献花）、南三陸さんさん商店街での交流活動を行いました。

旧戸倉中学校（戸倉公民館）・旧戸倉小学校跡地



語り部・伊藤文夫氏。南三陸ホテル観洋の従業員でもある。



「語り部バス」では、津波被害が今なお残る場所や、盛り土等が行われ復興に向かっていく様子が分かる場所等を語り部さんに案内頂きました。また、旧戸倉中学校では、南三陸町教育委員会の菅原義明課長に、当時の戸倉中学校の話をお伺いしました。これらの話を伺う中で、実際に被災地の様子を自分の目で見ることで、そして伝えていくことの大切さが、参加者の胸に深く刻み込まれたようです。

※旧戸倉中学校は、平成28年9月に戸倉公民館として再生。震災の記録写真、津波で壊れたドアや津波が襲った時間で止まってしまった時計等が保管される。“記憶を風化させないための場所”である。

南三陸町旧防災対策庁舎



南三陸町旧防災対策庁舎前では、前日の農業支援（小野花匠園）で製作した菊の花束を代表生徒が献花し、参加者全員が黙とうを行いました（旧高野会館は、バスの車窓から確認しました。）。

被災地での宿泊研修—防災士養成講座と南三陸町での交流活動の感想

防災士養成講座 (1日・2日)	被災地に行ったのは約5年ぶりだったが、町の様子がかかなり変わっていて驚いた。5年前にはなかった盛り土ができていて草もたくさん生えていた。防災士講座では「津波の仕組み」が印象に残った。ほとんどの地域の津波が黒かったのに、重茂という町(岩手県宮古市)だけは合成せっけんを使っていなかったから、透明な津波が来たということで、やはり自然と人間は切っても切れない関係なのだなと思った。	生徒
	「被害想定とハザードマップ」講座で、DIGとして地図を見ながら災害時の対処法をグループで話し合った。自分1人では考えつかないことも多くあり、ためになった。一人の考えでは限界があり、何人かで知恵を出すべきであるということについても、より深くみんなで話し合えた。臨機応変な行動、柔軟な考えが大切だなと思った。	生徒
	「地域の自主防災活動」講座では、新聞紙でスリッパが作れること、シワシワにすると断熱効果が上がること、またダンボールでベッドを作れば避難所内のホコリから体を守ることでもできると知った。ダンボールは仕切りにも使えるので、避難所でのプライバシー空間の確保にも役立つことが分かった。	生徒
	「津波の仕組みと被害」の講座で習った「想定に捉われるな。その状況の中でベストを尽くせ。率先して動け」という、片田教授の“津波避難三原則”が印象深かった。	生徒
	「被害想定とハザードマップ」の講座で、グループワークのリーダーとして意見をとりまとめるという経験ができた。今後にとっても役立つと思った。このグループワークの中で出てきた案等、自分に足りないと思ったことは、これからは是非やってみたいと思った。改めて、これまでの自分の防災についての考えを見直さなくてはと思った。	生徒
	「津波の仕組みと被害」の講座を受けて、改めて津波は恐ろしいものだと感じた。津波がなければこんなにたくさんの犠牲者は出なかったと思った。とにかく早く逃げて、高いところへ行くのが大切だなと思った。	生徒
	「避難所の開設と運営」でのグループワークでは、災害が起きた時に父親と連絡が取れない状況下での連絡手段について話し合った。みんながアイデアを出し合って、連絡方法や避難所に持っていくものについても話し合った。被災地の方にも意見を聞いたことで、ためになった。学校で1年1回でもよいので、被災地には行った方がよいと思った。	生徒
東京消防庁職員 による講座	災害が起きた時、消防車等はすぐに現場に行けないので、地域の人々が協力し合って助け合うことが大切である。実際に災害が起きたら水が一番大切になることも分かった。今後、不安の生活でも水を大切にしていきたい。	生徒
	大災害が発生した時には、政府、消防、警察、自衛隊等国家の全てがフルで対応していく必要があると実感した。大災害が起きた時は、行政府等も大混乱に陥っている可能性が大きく、自分たちでできることは自分たちでやる—防災士が地域のリーダーになることが必要だ。もしも市民がパニックに陥った時、我々が丸となってこれらを解消しなければならない。	生徒
	首都直下型地震に備えては、消防関連各署でその対応体制を綿密に検討していると思われるが、公助には限界があり、共助の重要性を実感した。	教員



※平成24年2月にオープンした仮設商店街「南三陸さんさん商店街」は、平成28年12月31日に閉鎖しました。
平成29年3月3日に、かさ上げした市街地に新しい商店街が開業されます。

<p>南三陸消防署 職員による講座</p>	<p>宮城県が被害を受けた時、全国から緊急消防援助隊が援助に来たというのは当然のようでもすばらしいことなのではないかと思った。また、漂流した消防隊員の方をその地域の中学生たちが救ったというのに驚き、勇敢でかっこいいとも思った。学んでいても行動にうつせなければ、意味がないと思うので、手順をもう一度確認しようと思う。</p>	<p>生徒</p>
	<p>及川さんに“防災リーダーとしてやってほしいこと”を教わった。①自分の身を守る対策をすること②家族と防災について話し合うこと③みんなが住んでいる地域を理解すること④防災訓練や各種イベントに積極的に参加すること。僕は、②がとても重要であると感じた。震災が起きて家族がバラバラになってしまっても、集合場所や非常持ち出し品をあらかじめ決めておくことで、その後の生活は大きく変わってくると思う。東京に戻ってからは、普段言われている大事なことも見落としていることがあれば、すぐ発見し、多くの人に伝えていきたいと思う。</p>	<p>生徒</p>
	<p>浸水域を決めてしまったことで、その外の人たちが避難せず亡くなられてしまったという話からは、警報・予報に頼りきらず、自分で危険を察知することの重要性を改めて感じた。及川さんの話から、震災当時のやるせなさも伝わってきた。</p>	<p>教員</p>
	<p>“ここを超えさせない”というラインを作り消火活動にあたったが、何度もそのラインを破られたという話等、本当に命がけで活動されていたんだと実感した。及川さんが救助・救命方法を教えた中学生に助けられたという話は、防災について教え広めることの大切さをも考えさせられる機会であった。</p>	<p>教員</p>
<p>ホテル観洋 女将の講座</p>	<p>女将の話聞き、今、何もないうちに準備等を進めておくことが、助かることにつながるのではないかと考えた。</p>	<p>生徒</p>
	<p>「千年に一度の震災は、千年に一度の学びの場であった」という女将の言葉。その学びの機会を与えられた私たちは、このことから学び、そして後世に伝えていく必要がある。</p>	<p>生徒</p>
	<p>東日本大震災は「千年に一度の大災害」と呼ばれています。しかし、ホテル観洋の女将さんは、「千年に一度の学びの場でもある」と。同じような被害者を出さないために、私たちが学ぶことをやめてはいけないと思いました。</p>	<p>生徒</p>
<p>語り部バス</p>	<p>語り部の方の、「私たちは皆さんに伝えることはできます。これをほかにも伝えないと意味がない」という言葉。今まで私は何かできることがしたいと思うだけで何もできませんでした。自分にもできることを見つけられました。</p>	<p>生徒</p>
	<p>旧戸倉中学校では、校舎1階の天井まで津波が来た。避難場所に指定されていたから「ここなら大丈夫」とみんなが思っていた。3月12日は同校の卒業式だった。再現された教室や職員室には時間が止まった時計や壊れたドアが展示してあった。ベランダに出てみたら、そこから海は遠く感じられて、ここまで津波が来たとは思えなかった。</p>	<p>生徒</p>
	<p>旧戸倉中学校にあった時計は、14時49分で止まっていた。ドア、黒板、時計、その空間の時間が止まっているのではないと思うくらい、学校にはあの日のままの物がたくさんあった。そのたくさんの物の中にと、無性に悲しくなった。黒板に残された「戸中大好き」の文字、担任の先生の似顔絵らしき絵、その文字と絵の周りにある人の名前。卒業式前日だったからその光景だったのだろう。当時小学生で、今も学生である私には、どうも他人事には思えず、胸にぐときた記憶だ。ほかの話も涙が出るほど悲しかったが、私には旧戸倉中学校が一番印象的だった。</p>	<p>生徒</p>
	<p>南三陸町旧防災対策庁舎へ行った時—あの建物にいた人たちが、雪が降るほど寒い時期に津波がやってきて、一生懸命に生きようとする精神がものすごいと思った。私は、その状況に置かれた時、頑張れるのだろうか。前日の農業支援で、自分たちで作った花束を献花できて良かった。</p>	<p>生徒</p>

